ほととぎすを待ちながら

好きな本とのめぐりあい

田辺聖子

中公文庫

中公文庫

ほととぎすを待ちながら　好きな本とのめぐりあい

1995年　9月3日印刷
1995年　9月18日発行

著　者　田辺聖子

発行者　嶋中行雄

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34　TEL 03-3563-1431(販売部)

©1995 CHUOKORON-SHA,INC. / Seiko Tanabe

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 本州製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202414-5　Printed in Japan

中公文庫

ほととぎすを待ちながら

好きな本とのめぐりあい

田辺聖子

中央公論社

目次

自分史という文学
——手記と文学の違い　7

ルンルンの歯
——笑いのつらだましい　29

サル屋と虫屋とヒト屋
——幼き日の愛と冒険　57

この道はわれのゆく道
——芸の奥儀　93

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

春風と死神野郎
——老人文学　121
いけない小説のたのしい美味
——美の乱酔　157
漂流する神々
——宗教と小説　191

ほととぎすを待ちながら

——好きな本とのめぐりあい

自分史という文学

――手記と文学の違い

私は評論家ではないので、書評という形では書けない。すべて、〈評〉というものは私の柄ではない。私にできるのは〈感想〉である。小学生の夏休みの宿題に読書感想文というのがあるが、まあいわば、それ並みだ。

文学賞の審査員というしごとが私にも年齢的に廻ってくるようになり、もとより私の任ではないものの、読者代表という立場ならいいか、と思って引き受けさせて頂いている。小説を読むことだけは昔から好きだからである。評者というより、読者の立場でなら、面白かった、つまらなかったといえばよく、日本文学興隆についての責任をとらなくてもいいからだ。それでこの欄（『中央公論文芸特集』）も、そういうつもりで読んで頂ければいいと思って引き受けた。「ほととぎすほととぎすとて明けにけり」という句ではないが、面白いと思った本にめぐりあうことが、特に趣味とてない私には、こよないたのしみである。（本業と趣味がくっつきすぎるのが私の弱点で、せつないところであるが――）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

私にとってのほととぎすともいうべき、めざましい書物を思いつくままに取り上げてみようと思っている。

かねて私は考えていて、結論が出ないことがあるのだが、それは〈手記〉と〈小説〉のちがい、ということである。この小説は文学といいかえてもいい。それは簡単なことじゃないか、小説の素材をナマのままで出したのが手記で、小説的宇宙に構築したのが文学だ、という答えはすぐ、返ってくるかもしれない。

しかし、ナマの素材だけなのに、あきらかに小説になっているのがあるから、困るのだ。(もっともこの場合、思いがけなく磨いてみれば珠玉だったということで、嬉しい当惑といっていいが――)

反対に、小説と銘打ってあるのに、いかにも手記手記していて、これも当惑する作品がある。

客観性のあるなしではないか、という答えも出るだろう。以前、ある事件の当事者となった女性が、その事件に触れた手記を読んだことがある。その女性は最初、きわめて抑制的に書いているのが感じられたが、ある人物が登場してくると、とたんに節度と調和を失い、〈……しやがって!〉とナマな怒罵を文字化し、〈……とぬかすのである!〉と息切

れしそうな憎悪をあらわにした。その女性の内部でまだ、その事件が終っていないことをまざまざと思わせた。（勿論、社会的にも終っていなくて、それだからこそ際物的に彼女の手記が社会から求められたわけなのであるが）しかし客観性を失うと、文章の信用度が低くなり、読者の共感が得られず、心にひびかないから読み捨てられてしまう。だから客観性を失うと手記になり、具えていれば小説となる、ということも、たしかにいえそうだ。

ところがここにまた、困ったことに、客観性がなくても人の心を打つ、ということがある。読み捨てた手記なのにいつまでも記憶に残るということがある。一方、リッパな小説で客観性もあるのに、心に残らないものがある。なんでだろうと考えてみて、心に残るのは主人公に魅力があって、その心理や行動に共感がもてるからではないかと思ったりする。共感がもてるというのは客観性を獲得していることではないかといえそうだが、そんな小ざかしいものを吹っとばして、面白い手記というものがあり、これだけ面白ければ、文章をひととこ、ふたとこ、直したらすぐ小説になりそうだ、と思わされてしまう。

もう何年も昔に読んだ手記――というより、読者の投稿で、ごく短いものだったが、それは不倫をした主婦の体験記である。主婦の手記というのが実はまことに面白くないもののトップであるのだが、また、一面、三文作家が（私のことだ）逆立ちしてもかなわぬ、生き生き潑剌たる面白さをもつものもあって、バラつきの多いものである。その書き手の

主婦は健康で体格のいい女性らしく、近所のゴルフ場のキャディをしている。職場で知り合った男性が、たいへんやさしくて、わりない仲になり、一、二へん関係があった。というのも夫はひょわなくせにやさしみがなく、マザコンで、近所にいる姑も、主婦に親切でないから、主婦はやさしみに飢えていたということになっている。男の方は農家の次男だが、お定りの、土地をゴルフ場に売った農家なので金はある。金はあるが、くだんの男、村人から少しあたまが涼しいと思われていて、中年になるのに嫁の来手もなく独身である。しかし主婦のみるところ、陰日向なく働き、おとなしく誠実で気がやさしいところから、気持が傾いたのであった。

ところがこれを、体力はないが気の強い夫がかぎつけ、男をとっちめて慰藉料を出させた。その額を、私は正確におぼえていないが十五万円ぐらいではなかったかと思う。主婦はそれを知るとかっとして夫と話し合おうとするが夫は姑の家にかくれて出てこない。出て来なさいよ！　とどなっても姑のうしろに隠れている。主婦はそのマザコンぶりにいらいらして表の鉢植を叩き割ってしまう。〈おとろしい嫁だ〉と姑はいい、暴力はよせ、という夫をつかまえて、この主婦は、〈十五万円も巻き上げたのなら、十万円は私の分だよっ、よこしなさい、当然でしょっ！〉と上前をはつるのである。今は家庭内離婚みたいに、夫は二階に住み、主婦は階下で暮し、子供は毎朝、主婦のつくる弁当を持って登校する。

〈いつまでこんなことがつづくかわかんないけど、しかたないし〉と主婦は今日もキャディに出かけていくのである。

どうも私の筆ではその爽快さを伝えにくいけれども、この主婦の堂々たるハチャメチャぶりがさわやかでおかしくって、それなりに奇妙な論理があり、私はとても面白く読んだ。

女性の文章講座というのや、小説作法というのはよくあるが、しかしこのあふれる原初的エネルギーは、教えられるものではないから困ってしまう。

思うにこの主婦に私が反撥を感じなかったのは、彼女が自己弁護もせず、立場を正当化して正義の旗を立てるという姑息なチエを働かさないところであろう。ナゼカ、これは女の好むなるポーズで、いわば、この臭味のあるのが手記、ないのが小説、ともいえそうだ。

それみろ、それならやっぱり客観性、という要素のあるなしにかえってくるじゃないか、といえそうだが……。

〈自分史〉というのが、いまはやりで、これは自分の生きた軌跡を書くのだから、いうなら手記の親玉のようなものであろう。手記でさえ小説にはなりにくいのだから、自分史を書いて文学になるということは、たいへんむつかしい。短い文章ならアラも目立たないが、

長くなるとボロが出るからである。文体というのは小説のそなえるべき要素で、文体の確立しているのが小説、それのないのが手記という区別も、まちがってはいないだろう。

ところで、私は今までに面白い自分史を二作読み、これは二作とも小説になっていると感じた。

その一つは『最後のロシア大公女マーリヤ』（マーリヤ大公女著・平岡緑訳、中央公論社刊）である。ロシア革命で処刑されたニコライ二世の年少の従妹で、革命のとき運よく難を逃れ、三十九歳のときニューヨークで、数奇な自伝を執筆する。そして一九五八年に南米で死ぬ。ロシアから逃れたのは二十八歳ぐらいのときらしく、以後四十年ほどの経歴は不明だけれども、自活していた、と序文に書いている。

だいたいこういう数奇な運命の人の手記というのは、運命だけで充分波瀾万丈であるから、かえって文学になりにくいものだし、タイトルだけで人は、何となく、（ああまた例の――）と思ってしまう。

私にしても半分は仕事のためであった。直木賞候補に『北緯50度に消ゆ』（高橋義夫著）というのがあり、これにロシアの皇女が出てくるので、『マーリヤ』を読んでおいたほうが理解がゆきとどくかという、いわば審査の準備のようなものだった。（ロシア革命は現代作家にとってさまざまなテーマやモチーフの宝庫であるようで、典厩五郎氏の『ロマノ

フ王朝の秘宝』というのも面白い冒険小説だった）

『マーリヤ』には数葉の写真も収載されているが、自伝の作者は美人というよりも聡明で気品のある、チャーミングな女性である。弟のドミートリ大公は、これはヴァレンチノばりの美男子である。大公女の父は皇帝の叔父であり、母はギリシャ王女だったが、母には二歳で死別してしまう。父は離れて暮しているので、大公女にとっては、母がその死と引きかえに生んだ弟のドミートリだけが心ゆるせる肉親であった。

ロシア貴族の生活やその日常を、彼女の記述でうかがうのはまことに興味あるが、その筆には甘美な感傷も、過剰な美化もない。彼女は後半生をアメリカという、全くロシアの文化とは正反対の文化圏に住んだので、自分が受けた教育の空疎な実体、意思表示や自主性の発露をきびしく規制する窮屈で凡庸な貴族教育を的確に把握して批判している。

しかしそんな不充分な環境の中で、少女は美しいもの、感動したものを長く記憶にとどめていたらしく、時々なんとも美しい文章が読者をたのしませる。この姉弟は、父の兄、セルゲイ大公夫妻に引き取られているが、この伯母は美しい人だった。

「ロシア皇后の実姉でもあるエラ伯母は、未だかつてあれだけ綺麗な人に出会ったことがない、と断言できるほどの絶世の美女だった。清純で、典雅な目鼻立ちの印象的な、スラッとした長身の金髪美人で、灰色がかった碧眼の片方の瞳に茶色い部分があるのが、彼女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor